

佐賀関で一本釣り漁師になる

大分県漁業協同組合青年部佐賀関支部

永 倉 和 久

1. 地域の概要

私たちが住む佐賀関地区は大分県大分市の東端に位置し、豊予海峡に突き出た半島周辺は「速吸（はやすい）の瀬戸」と呼ばれる急流で、好漁場として知られている（図1）。市町村合併以前の旧佐賀関町は、高度成長期までは旧日本鉱業佐賀関製錬所の企業城下町として栄えていたが、近年は高齢化・過疎化が著しく、平成17年に大分市と合併し、現在の人口は約9,000人である。

2. 漁業の概要

大分県漁業協同組合佐賀関支店には524人の組合員（正組合員270人、准組合員254人）が所属しており、水産物で全国初の地域団体商標登録に認定された「関あじ」「関さば」をはじめ、ブリ、イサキ、マダイ、タチウオ等の高単価魚種を、一本釣り漁業により漁獲している。近年では平均年齢68.8歳、高齢化率74.2%と、高齢化が非常に進行し、後継者不足に悩まされているが（図2、3）、平成21年度から国の支援制度を活用してIターン就業者を積極的に受け入れ、技術の継承を図っている。

3. グループの組織と運営

大分県漁協青年部佐賀関支部は定年45歳だが、運営委員長の指導により、Iターン就業者は必ず青年部に入部することになっている。今年4月時点での当支部の部員は14人であり、そのうちIターンによる新規就業者が10人を占めている。

4. 実践活動の取組課題選定の動機

私は大阪府八尾市で生まれ、兵庫県神戸市で育った。趣味で魚釣りをしていた父親の影響でその世界に漬かり、小学生の頃書いた作文に「将来は魚釣りのプロになる」と書いたほどであった。高校卒業後に水産系専門学校に進学し、それからは釣り道具メーカーに就職した。平日は製造部と営業部の掛け持ちの仕事をし、休日になれば東は福島県、西は長崎県まで足を運び魚釣りをする、そんな生活を7年間続けていた。

そのうち「この生活いつまで続けるんやろ」と自問自答するようになった。自分はやっぱり魚と接していたい、釣り具を売るより、釣るほうがおもしろい。それを実現するにはどうすれば良いかと模索していたある時、全国漁業就業者確保育成センターが開設している「漁師.jp」のホームページを見た。

そして平成26年2月、大阪府で開催された漁業就業支援フェアに参加した。一本釣り漁業で独立型は他地区にはなく、やるなら佐賀関しかないと思った。他に何人もの方が面接されていたので自分が選ばれると思っていたいなかったが、幸いにも内定をいた

だくことができ、平成 26 年度の I ターン研修生として佐賀関に移住した(図 4)。

5. 研究・実践活動の状況及び成果

(1) 研修中の 1 年間

研修は平成 26 年 9 月からの 1 年間で、その時私は 27 歳だった。

佐賀関ではベテラン漁師の師匠を付けていただき、引っ越しの翌日から研修が始まった。移住前に船舶免許を取得していたが、漁船の操縦は初めてで、本当にゼロからのスタートだった。

急流で知られる「速吸の瀬戸」で、操船しながら一本釣りをすることは、考えていたほど易しいものではなく、たったの 1 年で身につけた技術をもって独り立ちできるのだろうか、不安に感じたこともあった。しかし、私はもともと楽観的な性格であり、「なんとかなるやろ」と思っていた。

(2) 独立に向けて

研修中は師匠から毎月 9~14 万円の給料がもらえた。良く釣れた月にはもっとくださった。これは非常にありがたかったのだが、いくら家賃や生活費が比較的安価な佐賀関においても、大の男が 1 人暮らしていくのに、この給料だけでまかなえるはずもなく、サラリーマン時代に貯めたわずかな貯蓄を切り崩しながらの生活が続いた。キャベツの千切りが晩ご飯ということもあった。

独立すれば当然、この給料も無くなる。1 人で自分の船で出漁すれば、燃油代も道具代も全て自分で支払わなければならない。それを上回る収入が得られるのだろうか。研修が終盤に差し掛かるにつれて不安が募るばかりだった。ちょうどその頃、師匠の知人が船を手放すことになり、譲り受けることになった。近年は状態の良い中古漁船をタイミング良く見つけることが非常に難しいのだが、運良く船に出会えた。それでも、当時の私はその船を見ても気分が高揚することなく、お金の心配ばかりしていたが、これもタイミング良く、大分市役所が漁船購入の補助事業を開始し、半額の補助を得ることができた。

(3) 独立後の 1 年間

漁船を整備し、平成 27 年 9 月から 1 人で海に出た。独立当初は失敗の連続であった。ブリ釣りでは、餌用の小アジを全滅させてしまった。船のスクリューで仕掛けを巻き込み、次の日も新品の仕掛けを同じことで失った。隣の船は釣れているのに自分だけ全く釣れないのは毎日のことで、心が折れて早々に帰港することもあった。いちばん苦労したのは操船だった。接岸するとき距離を見誤って衝突して船を傷めたこともあった。

苦労が多かったが、師匠をはじめ、青年部の先輩、近所の漁師さんなど周りの方が丁寧に教えてくださって、一緒に船に乗り指導していただくこともあった。中でもいちばん支えになったのが、同期生の存在である。年齢は違うがお互い励ましあって過ごしてきた彼は、精神的な支えになってくれた。おかげで彼の周りの方とも仲良くさせていただけようになり、同期の彼には心から感謝している。

(4) 2 年目を迎えて

1 年目の操業パターンは、1~3 月と 8~12 月はタチウオ引き縄漁、4~8 月はアジ・

サバー一本釣り漁。ブリー一本釣り漁は年中、マダイとイサキは5～7月に良い潮回りが来れば狙うというスタイルだった（図5）。2年目は、期間中ずっと同じ魚を狙うのではなく、例えば1日のうちでも、引き潮はアジ釣りをして、満ち潮はブリ釣りをするなど、潮によって狙う魚を変えるようにした。これは師匠がいろんな漁法を教えて下さったおかげである。最近では漁協の職員さんにも「良く釣ってるね」とか「今日の水揚げトップ賞！」と褒めていただいたり、ベテラン漁師さんに「上手になった」と声をかけていただく機会が増えた。そして平成28年11月、大分県大分市出身の女性と結婚した。

サラリーマン時代や研修中は安定していた収入も、独立してからは、船の整備中やエンジンの故障中は収入がなくなるし、釣れたり釣れなかったり、安定とはほど遠い（図6）。しかし、結婚してからは、家族を養うという明確な目標があるためか、同じ海に出るのでも、意気込みがまったく違うのが自分でも感じられる。大阪生まれらしく「ノリと勢い」で、これからもより一層努力して海に出ようと思う。

（5）青年部活動

青年部の活動としては、大分県水産振興祭における水産物販売、地元の佐賀関小学校生徒を対象とした水産教室での先生役、ビーチクリーンアップ、イワガキやヒオウギガイの養殖試験、等を行っている。

これらの活動を通じて、考え始めたことがある。佐賀関の漁師の平均引退年齢は80歳前後である。私たち世代はまだあと50年以上ある。その間に子どもを授かり、その子どもが漁師になりたいと言い出すことがあれば、それ以上の長期間にわたって、自分たちが生活できるだけの状態を維持していかなければならない。そのために重要なことは、資源の管理・確保であると思う。

青年部は今年度6月、大分県農林水産研究指導センター水産研究部へ研修に行き、資源管理の重要性を学んだ（図7）。私たちの漁場である豊予海峡で、関あじが卵を産んでいる可能性が高く、漁場を同じくする臼杵・津久見地区の「まき網漁業者」と私たち佐賀関の「一本釣り漁業者」が協定を結んで産卵期間中の休漁日を設定するなど、資源保護に積極的に取り組んでいることなどを知った。このような取り組みを継承し、次世代につないでいくことが、われわれ青年部の使命だと考える。自己の利益だけでなく「みんなが良くなる」方向を常に目指し、各地方の出身者であるIターン部員が個々の特性を活かして力を発揮できればと思う。

6. 波及効果

私は佐賀関のIターン研修生としては6人目であり（表1）、移住当初からずいぶん地区の中で研修生の存在が認められているように感じた。しかし、平成21年度に来た初代の先輩は、本人は多く語らないが、たいへんな苦労があったのではないかと思われる。一般的に、漁師町は閉鎖的で、よそ者を受け入れない雰囲気のところが多いと聞く。一方で、佐賀関のように本当に深刻な後継者不足に陥り、漁村の荒廃を防ぐためにIターンの人材を募集し始めている地区も出てきている。また最近では市役所等が独自の支援策を講じるなど、本気で新規就業者の確保に取り組んでいるようだ。現在、大分県と大分市それぞれが支援して下さり、とても助かっている。私は、これ

は先輩方が苦勞を乗り越え、1人も離職せずに「定着率100%」という結果を残してこられたおかげであると思っており、本当に感謝している。

他県では漁師の厳しさに耐えられず離職する人も多く、就業者センターによると全国の定着率は67%である。その理由は、思っていたよりも作業がきつい、魚が安い、といったミスマッチによるものが多いそうである。一方佐賀県は、魚の単価が高いことや生活が便利であることに加え、周囲の支援や、漁協の選考基準が厳しいという理由で、100%が維持できている。後で聞いたのだが、佐賀県は漁協役職員の「補助金に頼らない、力強い漁業者を確保する」という方針から、独自の選考基準を設定しており、就業フェアの面接で「意欲」と「自己資金の有無」を確認しているとのことである。意欲は当然として、研修中や独立直後の経済的に苦しい時期を乗り越えられ、かつ漁船を購入できるだけの自己資金があるかどうかを選考のポイントにしており、これが、離職者が出ない大きな理由になっているようだ。

また、佐賀県は就業フェアに出展する際、Iターン就業者が同行し、就業希望者に対して厳しい現実を説明するようになった。現場の生の声が希望者に伝わりやすくなり、ミスマッチを防ぐような工夫といえると思う。

青年部活動の中で部員間の交流を深め、漁具や漁場の情報を交換することも、技術の向上につながっていると思う。私自身、独立1年目の苦しい時に、青年部員や同期生、地元の方々の温かい支援がなければ、続けてこれなかったと言っても過言ではない。

そして、私たちの存在はさまざまなメディアで取り上げられ、それを見て漁師になりたいと思う人も多い。来年度4月に1人、新たな研修生が富山県から来る。テレビで私たちを見て憧れを持って決めたそうだ。

7. 今後の課題

Iターンによる新規就業者が定着するために、残された課題がいくつかある(図8)。

まず挙げられるのが資源管理である。Iターンみんなが感じているのが、「思っていたほど魚が獲れない」こと。今後ますます資源の管理が重要であり、乱獲をしないよう業界全体での取り組みが必須である。私たちが声を上げて産卵期保護等の取り組みを拡大し、将来にわたって関あじ・関さばを提供し続けられるよう、努力していきたい。

次に住居の確保である。佐賀県の場合、通常は独身者が住めない市営住宅に、研修中だけは市条例の特例として住んで良いことになった。ありがたいことだが、研修修了までに新たな住居を探さなければならず、住める状態の家は少なく、解決すべき課題の1つである。

さらに、師匠の確保も重要な課題である。佐賀県の敏腕漁師であっても、人に教えるということはとても難しく、自分の漁の邪魔になることはよく理解できる。そこで、いずれは私たちが師匠になり、Iターンに教えられるようなシステムを作っていきたいと考えている。そのためにも、先人たちが築いた一本釣りの技術を継承できるよう、日々腕を磨いていきたい。それが、私たちを受け入れ、育ててくれている佐賀県に対する、何よりの恩返しだと思う。

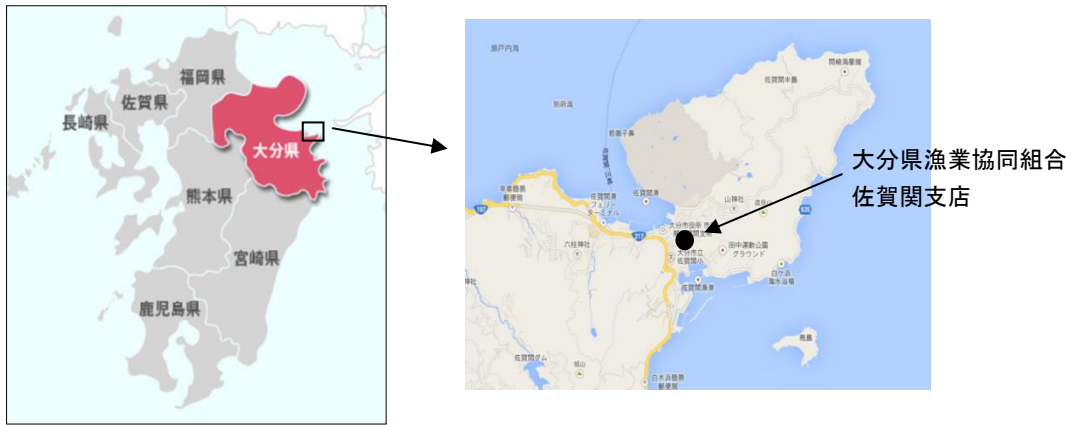


図1 大分県漁業協同組合佐賀関支店

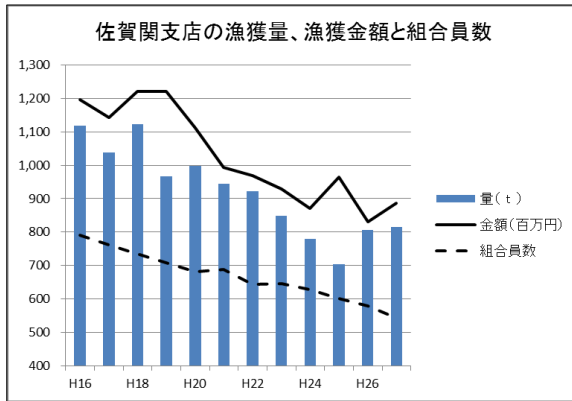


図2 佐賀関支店の漁獲量等の推移

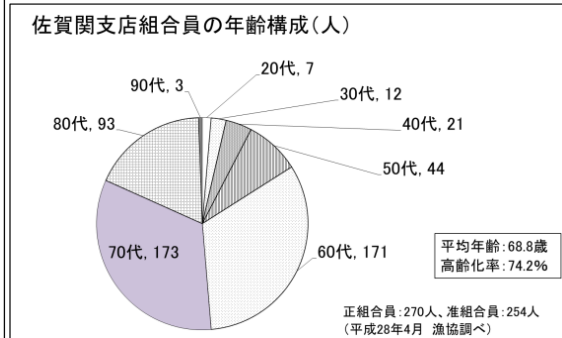


図3 佐賀関支店組合員の年齢構成

私の経歴

昭和 62年 大阪府八尾市生まれ 神戸市育ち
小学校の頃の夢「魚釣りのプロ」

平成 18年 水産系専門学校 入学

平成 20年 大手釣り具メーカー 入社

平成 26年 漁業就業支援フェアに参加

平成 27年 退職し、佐賀関に移住

図4 経歴



図7 水産研究部での研修の様子

魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
タチウオ	←								←			
関あじ・関さば				←								
ブリ	←											
マダイ・イサキ				←								

図5 操業パターン

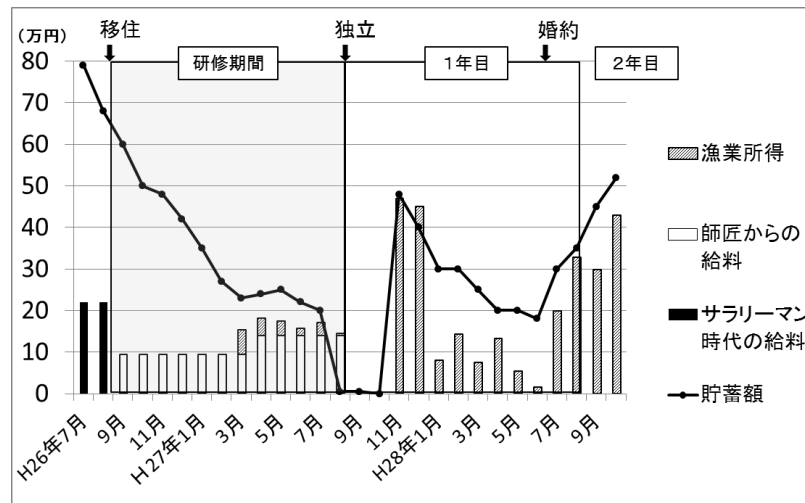


図6 所得と貯蓄の推移

表1 佐賀関支店のIターン就業者

年度	年齢	出身県
21	34	奈良
22	41	宮崎
	31	福岡
24	29	兵庫
25	34	愛知
26	27	兵庫
	42	埼玉
27	32	神奈川
	30	兵庫
28	48	兵庫

今後の課題

新規就業者が定着するために…

- ▷ **資源管理**
「思ったより魚が獲れない！」
資源を残すため、業界全体の取り組みが重要
- ▷ **住居の確保**
市営住宅に住めるよう市が特例
ただし研修中のみ
- ▷ **師匠の確保**
ベテラン漁師でも、人に教えるのは苦手
→Iターン漁師が教えるシステム作り

図8 今後の課題